



“Weather you like it or not” 気候変動の恐怖と実践的解決策

文学部 ラメイ・アレック



米国ミシガン州出身。教育と研究のため、シカゴ、サンフランシスコ、京都、東京と拠点を移し、本校に着任したのは8年前。専門は宗教学社会学。研究テーマは日本におけるカトリック教会の多文化共生である。現在、環境問題が引き起こす難民、貧困、紛争などに関心がある。
(らめい・あれっく)

気候変動を知らない学生はいないにせよ、積極的に解決策に取り組んでいる者は少ない。エコバッグを使用したり、節電したりする学生はいるが、これだけでは我々の地球を救えない。社会を化石燃料から遠ざけ、地球がすでに被っている破壊を止めるために国際、市民レベルの政治的意志を必要としている。これにはまず、社会と私たちの生活をどのように変えなければならないかを理解することから始まる。本稿では、授業を概観しながら、温暖化の公的、私的面からの解決策を考え、Special Topic in Area Studies科目を紹介する。

授業の概要

世界最大の力を持ったアメリカの経済は、その自然の搾取から始まった。これは、ジョン・スタインベック (John Steinbeck) の国際的なベストセラー「怒りの葡萄」で見事に捉えられている。この小説は、干ばつと土地の開墾が引き起こしたダストボウル (砂嵐) により農場を失った家族の姿を描いている。スタインベックは、自然は単に人間に搾取されるものではなく、永遠の進歩という神話は茶番劇であると語っている。社会に必要なのは、大量消費と利潤ではなくローカライズされた経済で必要なだけの食糧を生産する生活領域である。

「ダストボウル」から100年経つが、地球の環境問題は未だに解決していない。それどころか、気候変動はアメリカ国内のみならず、

地球全体に拡大してしまい、人類存続の最大の脅威となった。もはや、この問題の迅速な解決策を考える時代は過ぎてしまった。一人一人がライフスタイルを恒久的に変えることが今後の課題である。しかし、これは簡単には達成できないだろう。我々の世界を変える為に、個人と社会レベルでの努力は、今後数十年に亘って私たちに課せられるに違いない。だが、温暖化で兵器化された地球に苦しまされるよりはまだ良いだろう。この授業は、パブリックソリューションとプライベートソリューションで前半と後半に構成され、学生たちに気候変動を考えさせるものである。

パブリックソリューション

科学者によると、私たちの世界の気温は2100年までに摂氏1.5度から3.0度上昇する可能性がある。この運命から逃れるため、地球



授業の様子

温暖化が現在及び将来の生活にどのように影響するかを理解してから、解決策の実行に移る。まず、第一歩として、気候上昇による細かい問題点を掴むことが必要だ。学生たちはさまざまな新聞記事を読み、どの最先端技術が気候変動に歯止めをかけるかを紹介する。過去に学生が発表した策には、植林、太陽光発電、EV補助金、バッテリー生産、風力発電などがある。この授業の前半の終わりには、学生たちは市単位の廃棄物やゴミ処理を学び、越谷市のリサイクルプラザの見学でローカルな環境問題も考える。

プライベートソリューション

授業の後半は、「Planet of the Humans」と呼ばれる映画から始まる。この映画は、気候問題の本質は人間の食欲にあるのではないかと問題視している。様々な新聞記事から気候変動を防ぐため、学生たち自身はどのように自分たちの生活を変えるべきかを話し合う。過去数年間、これらのトピックには、車の運転の削減、家庭菜園の開始、地元での食事、リサイクルなどが紹介されている。

さらに、本授業では大学の堆肥プロジェクトで循環経済やエコソリューションに取り組む。外国語学科が購入した堆肥容器を利用し、食堂や教育学部と協力して学生に廃棄物削減などを教える。堆肥は庭だけでなく、CO2ガス排出の一因となる生ゴミの焼却量削減にも役立つ。段ボール箱、コーヒーかす、ペーパータオル、生ゴミ、プリンター用紙など、多くのものを堆肥化できる。私たちが作る堆肥は教育学部の畑に利用されたり、3号館7階の廊下に並ぶ多くの観葉植物の栄養源になったりすることもある。気候変動のコーステーマに

は、課外活動への参加の機会がいくつか組み込まれており、学生が実行できる小規模なプロジェクトを通じて個人活動を奨励している。

授業の要点

この授業を企画したのは、昨今使われている「SDGs」というキャッチフレーズに何か足りないと感じたからだ。「SDGs」(Sustainable Development Goals)という用語は、開発と社会変化の関係の理解に役立つが、それだけでなく気候変動の差し迫った危険の深刻さを知り、ローカルからグローバルへのたゆまぬ努力をしなければならない。私たちは科学者ではないが、皆が英語で勉強したり、議論したりすることで、温暖化に対する無力感をなくし、将来をより肯定的に考える。

時代を超えた教育の必要性

最後に、この4年生の授業の充実度を高めた文教大学シニアアカデミーの多大な貢献に感謝する。毎年、さまざまな経験を積んだシニア生がこの授業を受講してくれている。彼らの人生経験は、若い学生たちに深い影響を与え、新たなひらめきを導く。あるシニア生が語ったのは、事故で運転をやめざるをえなくなった結果、彼女の人生がより豊かになったということであった。就職してマイカーを買う夢を抱いている学生にとって、車のない豊かな人生は斬新な発想である。他のシニア生は、この授業を受講し、新しい家を購入しようとしていた彼の息子に太陽光発電パネルを設置するように説得した。マイホームを買う機会があれば、若い学生達はこの話を思い出すかもしれない。このように年輩の学生から後輩の学生、そして私もが大きなメリットを受けたように思う。受講生全員がこの授業で学んだ解決策を自分なりに世界に繋げてくれたらと願うばかりである。

